

終戦七十年の節目にあたり

鹿児島玉龍中学校 二年 川邊 茉里奈

朝起きて、早速カーテンを開ける。窓の外には、今日も、青空が広がっている。せみや鳥の鳴き声がある。朝の支度をしてバスに乗り、学校にいったって、帰ってくる。ただ、それだけの何気ない毎日が、どれだけ平和なことだろうか。私がおののけに考えるようになったのは、つい最近のことだ。

七十年前の八月六日、広島に原子爆弾が投下された。七十年前とすると、ごく昔のことのように感じる。しかし、日本に原爆が投下されたことは、ひとごとではない。

私が「物言わぬ証人」を目にしたのは、小学一年生のときであった。広島にある、原爆ドームである。建物は一部破壊され、唯一、わずかに原型をとどめている。戦争は、悲惨なものだ。小学一年生の時は、ただそれぐらいにしか思わなかった。しかし、中学二年生になって、ニュースを見ながら、思うことがたくさんある。三千度以上の熱線により、広島の町は、一瞬にして破壊された。周りにはがれきが散乱し、とても歩けるような状態ではない。そんな中で、レンガでつくられた原爆ドームだけが、その形をとどめた。高度な熱線やものすごい爆風にも負けず、立ち続けるドームの姿。私は、どこか、勇敢さを感じた。それと同時に、原爆の脅威と戦争の悲惨さを物語っているようだった。

私がおののけのように、原爆について深く考えるようになったのには、理由がある。それは、戦争から、今年で七十年ということだ。七十年と簡単に言うけれど、戦争を体験した人にとっては、一日たりとも忘れることのできない現実である。また、七十年の月日が経ち、その現実が忘れられそうになっている。今では、七十年特集として、戦争の特別番組をテレビでよく見かける。そこに映る、戦争を

体験した被爆者は、皆、戦争の悲惨さを語る。なぜ、あんなに大勢の人が、亡くならなければならなかったのか。戦争は、二度とてはいけない。など、被爆者は、タオルで涙をぬぐいつつ、取材に応えていた。戦後から七十年が経ち、被爆者の平均年齢は、八十歳となった。戦争の生々しい体験を、次世代に伝えていく人も、少なくなりつつある。過去の過ちを伝えていく人がいなければ、日本はまた、同じ過ちをくり返す。それではいけない。そんな時に、私はもう一度、原爆ドームに目を向けた。原爆投下により、広島は十五万人もの人々が亡くなった。その中で立ち続ける原爆ドーム。私は、この原爆ドームが、戦争の悲惨さを伝えられなかった方々の、代弁者なのではないか、と思った。たとえ、何も言わなくても、私たち戦争を知らない世代に、戦争の悲惨さを伝えてくれている。それは今も、そしてこれからも変わらないのである。

七十年という中で、時代は大きく変化した。日本は、世界で唯一原子爆弾が投下された国として、世界に戦争をしないことを誓った。あれから七十年、日本は確実に前へ進んでいる。それは、被爆者の方々が築いてきた、平和への架け橋なのではないか。今年八十一歳になる私の祖父が、私にこんな話をしてくれた。「空は、夜でもないのに真つ暗で、敵の飛行機が弾を落とすにやってきました。いつも空は戦場であつた。」と。

普段、何気なく見ている空は、青空がどこまでも広がり、雲がゆっくりながれている。敵の飛行機が飛んできたり、弾が降ってきたりすることはない。ましてや、爆弾が降ってくることもない。朝がきて、昼になり、夜がくる。当たり前前の今日が、当たり前前に過ぎていく。これこそ、本当の平和なのではないか。

私たちは、これから戦争の痛ましさと、平和の大切さを伝えていく必要がある。私たちも、原爆ドームのように、被爆者の代弁者になるのだ。こうして、日本が、世界が、平和を築いていけたら良いと思う。終戦百年の年を、むかえられるように。